

貫く協同の精神

華府滞りも去る八月十四日以来、既に四十日にもなりいよいよ明二十六日早朝から旅行に出ることにした。

華府の秋はちょうど北京の秋と似通うところがある。空はあくまで広くかつ青く、空気はいよいよ清澄で風はいたって和やかである。雨は少く時に降ることがあつても柔らかな細い雨である。和辻さんの風土という本には世界の風土圏を沙漠とか牧場とかモンsoon地帯とかに分けて各々その特色を鮮明にえがいてあるが、この地はまさしく牧場地帯に属し自然が柔順で、人間の営為を邪魔することは少いとこだといえよう。到る処にある公園や緑地には奇麗な芝生が植えてあつて、黒人の掃除夫が毎日たんねんに手入れをしている。その上に鳩やリスや雀が三々五々戯れているが、この鳩やリスは少しも人間を警戒することなく、鳩は豆をもつた通行人の肩や掌にとまるし、リスが足元まで跳んで来て前足をあげて食物を待っている風景は平和なほほえましいものだ。街路は広い舗道になつていてその両側には豪壮な建物が行儀よく並んでいる。通行人は少く雑踏している場面を見たことがない。ただ九月三日の労働記念日

に労働者相手の家庭用品の廉価売出しがあつたが主婦の行列をみたのは、その朝だけであつた。不思議に公衆便所というものがない。それは自動車を利用する人が多いせいであろう。また紙くずや吸殻の少いのはアメリカ人得意の公衆道徳の水準が高いことを物語るものであると思う。そういう明るい美しい街だがどうしたのかこの街は単調でこまやかな潤いというものが乏しいところのようである。日本の街が肉筆の字にたとえられるとするとこの街は活字にたとえられよう。

概してアメリカの文化はこの首都の相貌が象徴しているように能率と衛生という二つの筋金で賣かれていて、いわゆる「こく」とか「さび」というような屬性に乏しいところがあるように思われる。美術館に入つてみても米人の作品は数える程しかないし、どの名所を歩いてみても十八世紀以前のものは殆ど見当らない。歴史の浅いところであるから止むを得ないとは思つが何となく寂しく感じられる。そこでアメリカ人は建国の歴史はそのまま立派に保存してゆこうとする心がけをみんながもっているようだ。大統領の住むホワイトハウスは目下修理中だが、それがいかにも狭いので拡張しようとするやと全国の津々浦々から原形のまゝ保存してもらいたいという投書が何万と来たので拡張を

思い止つたということである。この国にこうした保守的な機運が漸次濃厚になって来ていることは見逃せないことだと思ふ。

序でにアメリカの能率の問題を少し考えてみたいと思ふ。どこの役所に行つてみても、或いはアメリカ人と会つて話してみてもわれわれはコーオーディネーション（協同）とかコーポレーション（協力）とかいう言葉をよく耳にする。日本ではそれが儀礼的な臭味をもっているが、こちらでは極めて当り前のこと、自然のことのように響く。およそ協同ということは他人の人格とか責任とかを素直に認め、た上でなければできないことである。十八世紀の末、東海岸の十三州が各州の利害の尖锐な対立を克服して今日の合衆国を築き上げたことは、もちろん独立戦争に三軍を指揮した平凡な市民ジョージ・ワシントンの卓越した人格に負うところが多いといわれているが、この協同の大精神がアメリカの歴史に息吹いていたからこそであると思われ。今日世界史はかつてない深刻な危機に見舞われている。この危機に臨んでアメリカはスターリンのような偉大な指導者にも恵まれていないし、ヒトラーやムッソリーニのような天才を持っているわけではないが、アメリカ人のこの平凡な市民的大精神はその実践の場面を世界に拡大して自

由国家群と協力して仮想敵国を打倒し平和と自由とを護持しようとする努力が続けている。そしてその努力の反映がこの首都華府をして世界首都的色彩をますます濃厚にしている。

神の国は近きなりに

僅かに眼を挙げれば正にこの処に在り

この処と天国とを劃る

一線も無く一土も無きなり

とは、ミラーのカリフォルニアクリスマススの一句であるが、アメリカ人はこうした楽天的天縱の意気をもって、簡素な生活と粗野な精神をもって嘗々たる工夫と実践を続けている若い国民であるといえよう。（十月二十二日）

政府頼らぬ私大

九月二十六日早朝私は四十日間も滞在したワシントンに別れを惜しみつつユニオン停車場からバルチモアに向つた。約一時間の行程である。

ここはチェサピーク湾に面した良港で、貨物の積卸トン数はニューヨークに次ぐ米国第二の商港であり鉄鋼業、造船業、食品加工業などの盛んなところである。人口は百七

アメリカを行く

十五万というから、まず米国第六位の大都会に当るわけである。ここでは予定通り市の西北部の閑静な地帯にあるジョン・ホプキンス大学を見学した。御承知のようにアメリカで歴史のある有名な大学は大抵私立だが、この大学もハーバード、プリンストン、エール、コロンビアなどの各大学と同様、私立の大学で学術的水準の高いことで一般に聞えている。ただ最近の傾向としては各私立大学の財団はインフレーションの結果、その財政が漸次苦しくなってくる反面、各州立大学（アメリカの国立大学は既報のハワード大学という黒人の大学だけで公立の大学は大部分州立）の財政力が逐次私立の大学を凌駕して設備と教育内容の充実をはかり、同時にその学術的水準の向上を実現している。ここで私立大学（州立）の工科等は全米一といわれている。この大学も御多分に洩れずその財政は苦しいわけで千四百万ドルの基金から生ずる収入と一人年額六百ドルの授業料による収入を併せても大学の経費の半分程度にしか達しないので、残りの大部分は政府特に軍関係の委託による研究費収入に依存している始末である。もちろんかかる変態財政は永続するはずのものではないので、私は事務長のパーフォード博士に「教育ということは国の存立に至大な関係がある大切な事業であり、貴方の大学は歴史のある立派な大

学で優秀な卒業生を多く送り出しているのであるから、これを国立にするということは不可能なことではないように思うが御所見は」と聞いてみたところ、「わたしの大学はアカデミックなレベルの高いことで世界に信を博している。もちろん将来の大学財政は決して明るいものではないがこの信用さえ何とかして維持し向上せしめて行けば決して行詰ることはない」と確信している。政府の援助に頼る気持は毛頭ない、現在のように対等の契約で研究原価を補償してもらっているだけでも政府の役人が無闇にやってきて報告だ監査だとやられるのでそのレッド・テープ（いたずらに形式や手続に拘泥するやりくち）には泣かされているのだから」と彼は答えた。

その自由と独立をあくまで守り抜こうとする気概に感銘すると同時にこだわる習性をもっているのかと思つていささかこつけない感じがした。ここでは日本人の留学生が九人在学している。翌二十七日朝バルチモアを出た私は、再び汽車でウォシントンに行きナイロンで有名なジュ・ボン会社を訪ねた。この会社は一八〇二年、仏人のジュ・ボン氏がこの地に創立したもので現在では十四億八千万ドルの資本と九万従業員を擁する米国有数の大化学工業会社である。世界の纖維界の革命児ナイロンはこの会社の研究所の

カロサーズ博士によって発見されこの会社で工業化したものである。私は研究所長クリッジ博士を訪ね昼食を共にしつつ研究所の模様を尋ねた。ここでは現在千八百人の技師と三千人を超している補助員が研究に従事していて年額三千八百万ドルの研究費を費しているそうである。この研究費は製品原価の三%に当るといふ(アメリカの大きい民間会社はそれぞれ自己の研究所をもっているがその研究費は平均して概ね原価の一・五%位でしよう)と博士は付言していた)。博士は「研究といふことは一見無駄のように見えるが永い目でみると立派に採算のとれるものであること」は、この会社の永い歴史が実証している。そしてこの研究は一つのチームワークであつて多くの頭脳を一つの研究目的に組織的に動員することが大切であるが、それかといつて個人の自由な研究精神を抑圧することは避けなければならぬ。偉大な発見というものは彼の頭脳に去来して終始動いて止まぬあるものを追つて止まない風のように自由なそして空想的な個人のひらめきから生れるものだ。さらにもう一つ大切なことは国全体の学術的水準が上つてきて終始強い刺激剤を供給してくれることである。その意味でこの会社ではフェローシップ(給費生)に毎年四十万ドルずつ支出している。これは各大学の優秀で貧困な学生(日本

の育英制度のように凡庸な学生の生活費の補給とは趣を異にする)の学資に充てるわけであるがもちろん大学に任せてきりて大学や学生はこの会社に何の義務も負わないわけだ。フェローシップと並行して各大学の基礎的研究の財政的な支援もやつてゐる。こうして全体の水準が向上するところが何より大切であると思う。お国でも研究費を出し渋るようなことがないことを希望する」といつていた。

ジュ・ポン社を辞してから直ちに汽車をつかまえて夕刻フィラデルフィヤに着いた。ここは人口二百五十万でニューヨーク、シカゴ、ロスアンゼルスに次ぐ大都会であるが、古い都だけに道路が狭くていかにも窮屈な感じがした。十八世紀の末、米国の憲法会議が開かれたインディペンデンスト・ホールは街の中央にある。翌朝郊外にあるパット車両工場を一巡してステンレス・スチールの客車を造つてゐる現場を限なく見学した。ステンレス・スチールで車体造ると重量が三分の二になり維持費が殆んどかからないから燃料と労力の節約になるわけでインシヤル・コストが高いけれども国内はもとより各国から注文が殺到している状況である。工場は流れ作業式になつて最終工程で毎日二台ずつの銀色の客車車両が引込線上に艶姿を現わす仕組になつてゐる。私が見た時はちょうどイラン向の車両が出来上つ

たところであった。昼食時になったので工員の様子を見てみると工場の食堂にはいる人はまれて各自自分の職場で粗末な紙の袋からパンやサンドウィッチをつまみ出してかじっていた。工場の周囲の空地には何百台という乗用自動車が行儀よく整列しているがあの自動車で通勤する人達の食事としては簡単なものだと思われた。

バッド工場からは新しい住宅が次々と建てられている郊外を十五マイルもドライブしてフィラデルフィヤ駅に辿りつきニューヨーク行の汽車に乗り込んだ。もちろんステンレス・スチールで造ったスマートな客車である。汽車は半ば紅葉した森の中をまっすぐに貫く複々線を走って、二十八日夕刻八ドソン河床の地下道を抜けてニューヨーク市が巨体を横たえるマンハッタン島に滑りこんだ。(二十四日)

勤労が築く威容

ニューヨークについてから最早一週間の日子が経ち、明晩はモンゴメリーに向けて出発しなければならなくなつた。ここでニューヨーク便りを差上げる順序になつたわけだが、あれよあれよと驚くもの許りで一向に纏りのある觀念がつかんで来ない。ニューヨークはそのように巨大な代

物である。

この大きい構造物を簡単な一言で表現できる方法がないものかと色々考えた挙句、十月三日私は市役所にエバン氏を訪ねてニューヨークの財政規模を手がかりに聞いてみた。申し忘れたがニューヨークの実際人口は八百七十万と市役所は推算しているが、その本年度の予算は十三億三千七百万ドルである。つまり四千八百十三億二千万円になるから日本政府の予算の約七割三分に当るわけである。四万二千人を擁する大地下鉄は市の経営であるが、かかる特別会計はもちろんこれは含まれていない許りが、市のもっている土地や建物等の改良補修費等は別に七億ドルに及ぶ資本勘定で整理されているからこれらも含まれていない。市の吏員は二十万七千人いる。面白いことにはこの十三億余万ドルの経費の半分程度が不動産税で賄われていることである。

ダウンタウンからアプタウンまで百何十町にも及ぶ真直な道路が何十本も通じていてその両側に重い鉄筋の高層建築が行儀よく並んでいるのであるが、その財産価値というもののはどの位だらうかといつことがすぐ疑問になつてくる。市が不動産税の課税標準として見積っている価格は約二百億ドルだといわれている。もっともこの価格の中には

ニューヨーク市の本拠であるマンハッタン島だけでなく周辺のブルックリンとかクイーンとかリッチモンド等の地域のものがはいつているわけである。それにしても元来課税標準というものは実際価格よりずっと下回っていることを頭に置いてかからなければならぬ。この怪物のように巨大な存在はもちろん鉄とセメントと大理石の無意味な堆積ではない。また地から湧いたものでも天から降ったものでもない。まさにこの豪華な装いはアメリカ人の勤労の蓄積に他ならないわけである。アメリカ人が日々の勤労を根気よく蓄積して浪費しなかったためにこの重量感に富んだ世界の都ができ上ったわけである。そのような見方でも一度ニューヨークの街を見、道行く人々を見てみると改めてアメリカ人の偉さに頭が下る思いがする。

有名なエンパイヤステイトビルは八十六階の高層建築であるがこれに匹敵する高層建築も決して稀ではない。特に株式で有名なウォール街付近とか盛り場の中心タイムスクエア街付近等は四、五十階の建物が櫛比し屹立して天を仰ぐのに苦勞する位である。しかし私にとってこれ等のなかで心を引かれた二つの建物がある。その一つは国際連合（ユナイテッド・ネーションズ）であり他の一つはロックフェラー財団である。国連は御承知のように一九四五年す

なわち終戦の年の十月二十四日サンフランシスコで生れた。当初は五十カ国が加盟していたが現在では六十カ国になつてゐる。この国際的組織は申すまでもなく子孫を戦争の災厄から救ひ人権及び国権の權威と価値を再確認し国際的正義を維持し社会の進歩と生活水準の向上を促進するために作られたもので、平和と安全を維持するためには加盟国の力を結集してその脅威を除くと同時に、各国民の経済的社会的進歩を促進する多くの国際的機構を運営しているものである。われわれは朝鮮戦線で戦っている軍隊が国連旗の下に戦う国連軍であることを知っている。イランの油田問題の紛争がいよいよ今週末国連にもちこまれることになつてゐる。

これらはもちろん国連の大きい仕事であるが国連は四千六百万ドルの年間予算をもつていろいろの仕事をしている。すなわちその下部機構に御馴染のユネスコをもつて教育、科学並びに文化の交流と進歩に寄与し、アイ・エム・エフ（国際通貨基金）を通して金融の流通をはかり、その他衛生、交通、通信、航空、食糧、難民救護その他各般の仕事を手がけている。そしてその国連の本部がニューヨークにあるわけで、この建物は一昨年完成したものが長さ二八七フィート、幅が七二フィート、高さが五四四フィ

ート、三十九階の豪華な建築で工費は七千五百万ドルといわれている。目下総会を開くドーム式の会議場と委員会会場がこのスマートな事務官の建物に付属して工事が進められている。国連が国際連盟のような解体の末路を辿るか、それとも世界の平和を武力の行使をまたないで守ることができる有効な組織に成長するかどうかは将来の問題であるが、人類も人間と同様失敗を重ねる度多少ずつ賢明になるものであるから少くとも連盟の轍を踏むことはあり得ないと思うし、経済や文化の面の現実の寄与は決して無視できない力をもつてきている。そして日本も明年はおくれ馳せながらこれに加盟することになるであろう。

日本が加盟すると人口が多く国民所得（国連の経費の分担や国際通貨基金の出資金は国民所得によって按分されるわけである）が大きいので当然相当の顔役になれるはずである。もう一つのロックフェラー財団というのは、ジョン・ロックフェラー氏が一九一三年に世界各国から病気の災厄をできるだけ除去しようとする悲願をおこし三千四百四十三万ドルの私財を投じて創設したものである。当初は十二指腸の退治がまずとり上げられたそうであるが、その後同氏は一九二九年までに二億四千六百六十余万ドルの基金を財団に寄付して、財団の事業を医学や衛生の範囲から

拡充して自然科学や社会科学の進歩、特に農業の進歩に力点をおいた広般な活動を続けている。この財団の建物は二ユーヨークの中央に七十階の威容を誇って心ある遊子の歩を停めさせている。（十月二十六日）

豊饒の国を離れて

私は、十月十五日早朝、六十三日目には漸く振り出しのサンフランシスコに辿りつきました。ところが、対日飛行便は輻輳しているので十八日になって漸く一つの座席をとることができ、十九日早朝、サンフランシスコを後にして西半球を分つ渺々たる空間を彩る白雲と碧濤を友にしつつ空路故国に急ぎ、二十一日午前十一時に羽田に安着しました（途中子午線の関係で一日とばす。）

サンフランシスコに着いてから、私は、四国新聞に十数回にわたる拙ない通信を送りましたが、それは顧みて冷汗をかくよつな粗末なもの、未熟なもの許りでした。尤も、命ぜられた仕事の余暇を盗んでのなぐり書きであったせいもありですが、もともと私自身の無力と無学の致すところ、その中には、色々の過誤や偏見があったことと思ひ、読者諸君に改めてお詫びいたします。

ところで、私がサンフランシスコに帰りに着いた途端に、どうしたはずみか、最初当地から四国新聞に送った善の第一信が私の手元に舞戻ってきました。捨てた児を拾ったような気持で読み直してみると、第一信の最後のところに、私はこう書いてあります。

「私は、これからここに開花した文明の相貌と、経済の息吹きを観るわけですが、更にその底を流れている開拓者の雄心や独立と自由を尊ぶ不羈奔放な精神をも探ってみたいと思います。雄国にはそれに相応しい雄大な精神が生きて働いていると思うし、遅しい建設は、勝れた建設的能力に買かれてはいる筈だし、巨大な蓄積の裡には、嘗々たる労働と蓄積の美德がかくされていなければなるまいと思いません。私は注意深くその辺の消息を観察し、味得してみたいと思います」と。

私の通信は、勿論この当初の野心の十分の一にも応えていないと思いますが、全通信を通じて、私は、アメリカ人のメンタリテイの重要な局面を観察することに主眼をおいていた積りです。というのは、過去の日本に流行し、今日もまたその根が絶えていないアメリカ観というものは、卑近な例を以ってすれば、どうもアメリカという国はなり上りの金持の御曹子のようなもので、はち切れるような若さ

と始末におえぬ程の富をもってはいるが、何となく思慮に乏しく、しびい文化の味とか、深い哲学の倫理を解する能力に欠けている国であるというのが一般のように思われます。そういう観察が今なお普遍的であるとすれば、それは非常に皮相な見解であり、危険でさえあると思われたからです。

もつとも、かような見方も全然見当違いとは言いいられないものがあります。アメリカのもっている一面を捕えているともいえましよう。例えば第二次世界大戦を回顧してみても、アメリカの嘗々たる世界政策的努力は、結局ソ連に漁夫の利をもたらし、スターリンの赤色勢力圏に寄与したことになるので、今日アメリカは大きい迂回的浪費を忍びつつ、その失地回復に懸命になっている始末ですし、また、哲学、宗教、文学、科学等の領域において、これというオリジナルな偉大な労作をアメリカの歴史に見出すことも容易ではないように思われます。といって、アメリカをそのようなものとして片付けてしまつことは、皮相のそしりを免れないし、時には大きい過誤の原因にもならうかと思われまふ。

私がワシントンを立てつ時に書き送つたことと思いますが、今日のアメリカに栄えている文化は、今迄のわれわれ

の文化史的方法論では、おし計ることがむづかしい何か異質の文化であるようです。それは、天国と地上をつなぎ、無限と有限との架橋を具象的に志す実証的文化であり、退嬰とか諦観とかいう要素を徹塵も身につけていない積極的で楽天的文化です。更にもっと注意深く観察しなければならぬのは、その文化の担い手であるアメリカ人の態度です。彼等は、かかる豊心を実現するに当って、深遠な哲学の基礎づけを求めようとせず、深刻な面相で勿体ぶるわけでもなく、極めて淡々と常識的にこれをやっています。

また、それは見方を変えれば、勤労と節約の文化といえましょう。如何に豊穡な国土が眼前に展開されたとしても、僅か二百年の間に、これだけの蓄積をやったのけ、これだけの国力を養ったということは、どう見ても平凡なことではなからうと思えます。これを建設的能力と言ひ得るならば、正に非凡な建設的能力の具体化したものでしょう。そして、その裡には倦まざる勤労と節約が積み重ねられていくわけです。旧世界の沈滞と生活苦より離脱して新しい原野に雄々しい鉄を入れた開拓者特有の単調な虚飾のない生活と明日への弛まざる願望は、彼等の勤労と貯えを鼓舞したことでしょう。

次にそれは動いて已まない停滞を知らない動的文化であります。競争と動力によって、ほとんど自動機械のように豊饒の只中を勤労と節約という一連の実践が自発自転しつつ無限の行路を走っているようにさえ思われます。つまり、一つの運動が起これば、それが契機となって次の運動を惹起すという仕組を無限に繰返しつつ発展している文化ともいえます。そしてそういう過程を辿りつつ、一朝眼が醒めてみれば、アメリカ人は、自由国家の頂点に立っている祖国の姿を見出したといつていい程です。

かつてみざる世界史的危機に直面しつつも、彼等は依然口笛を吹きステップをふみながら別段深刻な顔付きも、尊大な素振りも見せないで、「やるさ、われわれはとことんまで戦うのさ」といつて、日々の勤労に淡々と励んでいます。過去における世界政策の失敗も、ワシントンの一隅にある少数の不平等分子の論議に任せ、「世の中は明日に限るさ」という楽天的気分で、明るく楽しくやっているのがアメリカの一般の大衆です。

かくて、今日のアメリカは、史上にかつて類例をみない巨大な怪物のような相貌をもって、膨大な生産力を限りなく発揮しつつあります。老英国をはじめとして世界の自由国家で直接間接アメリカの援助なしにその国の経済と軍

備を整えている国はほとんどない有様です。一方の極にあるソ連でさえもが、第二次世界大戦におけるアメリカの対ソ援助物資と、若干の緩衝地帯から流入するアメリカ製品が、どれだけソ連の復旧を促進し、軍備の強化に役立っているか想像に難くないところです。スターリンの慧眼は克く道般の消息を見抜いている筈ですから、彼は軽々に対米戦争を挑むというような愚かなことはしないでしよう。それは、何としても強大な手こわい相手ですから。従ってソ連としては専ら平和攻勢を通して日独の赤化に当面の力点をおいてくるものと思います。それもありきたりの人民戦線などという古くさい手段ではなく、もっと手のこんだことになってくるものと想像されます。それが講和を廻ってのわれわれの大きい課題になりましよう。

東京、サンフランシスコ間の航程は約三十時間です。世界はこのように狭くなってきました。かくて、アメリカ大陸の安全と繁栄はかつてのモンロー・ドクトリンでは保証することができなくなりました。今日のアメリカはかかる孤立政策を一擲して、果敢に新しい世界政策に乗り出しています。この勢いが新しい平和をもたらすか、あるいは地球の荒廃を招くような大きい戦争に発展するかはにわかには判明し難いものがありますが、依然として、日本がどの陣

営にとつても世界政策の一つになっていることだけは間違いないさそうです。

私は全通信を通じてアメリカを賞讃しすぎたかも知れませんが、しかし、感じやすい客心に映ったアメリカの姿は、ざっとそのようなものであったわけです。それは明るく多彩な色彩にいろどられた大巻でありました。今、私は静かに大巻の頁を閉じようとしています。(十月十六日サンフランシスコにて)

(本篇は「四国新聞」に未発表で初出)